【特別寄稿】

幕末・明治期における
在横浜・神戸アルメニアン・コミュニティ
―アプカー商会論―

重　松　伸　司

はじめに

アルメニア人のコミュニティは、黒海とカスピ海に挟まれた南北の隘路を故地とする。古来、彼らは陸路中央アジアへ、また、海路南アジア、東南アジア、更には中国へと移動した。近代以降今日に至るまで、彼らの多くは、更に北米やオーストラリアに渡り、定住している。

この小民族集団が、交易に従事する「移動商人」であり[1)]、あるいは、東南アジア各地の著名なホテルの創業や海運業に携わったこと[2)]は、これまでの研究が部分的に明らかにしている。しかし、その移動経路やコミュニティの組織・機能、商業活動の実態、アルメニア教会の文化史的意義などについては、なお不明な内容が多い。

19世紀以降、インド及び東南アジアに到来したアルメニア人「海商」について、筆者は断片的ではあるが紹介した[3)]。また、2001年より数年間にわたって行ってきた、東南アジア各地での現地調査によって、アルメニア教会と彼らの墓地・墓碑銘の追跡調査を実施した[4)]。これらの研究の中で、南アジア及び東南アジアにおけるアルメニアン・コミュニティの果たした役割や歴史上の位置づけについては言及した。したがって、小稿ではあらためて「なぜアジアにおけるアルメニア人の研究か」については触れない。

一連の調査の中で、おぼろげながら明らかになってきた史実がある。それは、ごく少数ではあるが、幕末から明治・大正にかけて、横浜・神戸で活躍したアルメニア人コミュニティが存在したことである。本稿は、幕末から昭和初期にかけて活躍したアプカーなるアルメニア人の小コミュニティについ

て、考察を加えたい。

１．アルメニア人 A. M. Apcar の事績：「墓誌」記録から

横浜外国人墓地には、横浜に居住していたと考えられる一アルメニア人、アプカー（A. M. Apcar）氏の墓誌が保管されている。その墓誌は、Ａ４版１枚のタイプ打ち記録であり、墓域、被埋葬者の姓名、国籍、歿年、種別（性別）、資料（分類）記号、備考の順に頭書され、それに続いて、故人の死因、生前の業績が列挙され、末尾には J. W. M. Dec. 1. 1906と手書きの署名が付されている[5)]。以下にその墓誌全文［図１］を記し考察を加える。

＜頭書＞
墓域：第14区
姓：Apcar　　名：A. M.
国籍：Rus.（ロシア）　　歿年：1906
種別：Mr.
資料：D
備考：アプカー商会主、神戸ｸﾞﾚｰﾄ・ｲｰｽﾀﾝ・ﾎﾃﾙ経営）

＜本文＞
A. M. Apcar 氏急逝の報せがもたらされた。木曜日の早朝時、神戸の Great Eastern Hotel において突然、卒中に見舞われたという。同氏は火曜日に横浜から帰宅し、水曜日も平時と変わらず、夕食後数人の知人と歓談し、10時ころには床についた。数分後に、ボーイの一人が支配人を呼びに走り、マーティン医師が駆けつけると、意識不明のアプカ―氏が発見された。急きょキルパトリック医師が呼び出されたが、なすすべもなく午前１時半にアプカー氏はみまかった。

故人は、50数年前にイスファハンで生まれたアルメニア人で、著名なアプカー海運（Apcar line of Steamships）の経営者一族に連なる。Kobe Herald 紙によれば、爾来25年有余にして、同氏は香港で事業を成功させ、10年あまり同地に滞在した。その後、横浜に進出してアプカー商会（Messrs. A. M.

Apcar and Co.）を設立し、大々的に輸出入業を展開し、神戸および東洋（the East）と西欧（Europe）の港市にも複数の支店（branches）を置いた。５年程前、同氏は更なる精力を神戸のグレイト・イースタン・ホテル（the Great Eastern Hotel）の創業に傾けた。（ホテルは）元々サカエ町（Sakaye-machi）にあったが、ほぼ１年後には現在の手ごろな地に移った。アプカー氏はまたその１、２年後に、シオヤ（Shioya）のビーチ・ハウス・ホテル（Beach House Hotel）を取得し、多くの時間をこのホテルで過ごした。しかし、彼の本業は、アプカー商会（Messrs. A. M. Apcar and Company）の経営であり、ホテルは、専ら支配人に委ねられていた。故人は香港ではフリーメーソンの会員として知られ、神戸では同協会支部（lodges）の一員であった。アプカー氏は社会的・公的な活動については、必ずしも著名な人物ではなかったが、巷間よく知られており、その死が悼まれる。アプカー夫人および３人の遺児の心痛に多くの同情が寄せられるであろう。

J. W. M. Dec. 1, 1906

「アプカー氏」とは一体どのような人物なのか。また、同氏の生前における企業家としての活動はどのようなものであっただろうか。

これまでのところ、我が国におけるアルメニア人コミュニティに関する詳細な資料や文書は見当たらない。それゆえ、アプカー氏をはじめ、アルメニア人コミュニティの日本到来の始期やその経緯、移住経路、活動の詳細は不明である。そこでまず、利用し得る断片的な資料から、「アプカーなる人物」とアルメニア人コミュニティの活動について再現する。

上記「墓誌」の体裁から、「墓誌」は末尾に記載された略称 J. W. M. なる人物によって、1906年12月１日に記録されたと考えられる。「墓誌」中には、具体的な年月日の記載はない。したがってまず、歿年（1906年）と地名を手がかりに、年代と居地の確認を行うことになる。

「墓誌」によれば、同氏は1850年代半ばにイスファハンに生まれたアルメニア人で、ロシア国籍であった。25歳頃、つまり1880年前後に香港で事業を始め、10年程の間つまり1890年前後まで同地に滞在している。その後、横浜に来住し、アプカー商会を設立、死の５年ほど前、つまり1901年前後に神戸

にGreat Eastern Hotelを開業し、死の1, 2年前、つまり1904、5年頃には、神戸・Shioya（神戸西郊の海浜部、塩屋と考えられる）にBeach House Hotelを取得している。また、同氏は香港においては、フリーメースンの有力な一員であり、神戸においても積極的に活動していたと考えられる[6)]。

以上が「墓誌」からたどりうるアプカーなる人物の足跡・事跡である。

2．Apcar家の事跡：「墓碑銘」記録から

さて「墓誌」の保管されている横浜外国人墓地についてである。5600坪の墓地には22区の墓域があり、埋葬記録は4500、現在の墓石数は約2500基である。そのうちの一区域である第14区には、少なくとも三基のアルメニア人墓碑がまとまった1区画に建立されている。以下がその記録である。

第14区の墓碑は、3基ともそれぞれ上段から順に、アルメニア語、英語で陰刻されている［図2-A］。

一基は、墓石の風化が進み刻文の判読が困難であるが、次のように読みとれる。［図2-B］

（？）は判読不明あるいは判読困難な文字・数字である。

アルメニア語刻文

ACAK(?)　MICHAEL　APCAR

D(?)ec(?)ember 31 1855-November 22(?) 1906

隣接する一基［図2-C］は、風化・損傷がほとんどなく、刻文の文字はかなり明瞭であり、次のように陰刻されている。

アルメニア語刻文

DIANA ACABEG APCAR

October 17th 1859-July 8th 1937

更に、もう一基小ぶりの墓石［図2-D］が二基に寄り添うように建立さ

れている。その刻文は次のように読める。

アルメニア語刻文

? ? RIE DIANA APCAR
BORN FEBRUARY 23 1923
PASSED???? A BRIGHTER LIFE
ON ??? ???? DAY OF JULY 1923
LOVE NEVER FALETH

３．Apcar 家の族史：「年譜」記録から

これらの墓碑は一体だれのものなのか、彼らの事跡はいかなるものだろうか。日本アルメニア研究所が刊行する「アララト通信」の記事「ダイアナ女史とその周辺について」には、１枚の手稿「年譜」が記載されている[7)]。この年譜は、Apcar なる人物の曽孫で、1995年当時米国・コネティカット州に居住のライオネル・ガルストゥン氏の情報によっている。以下、この「年譜」を傍証資料として検証する［図３］。

手稿「年譜」の系譜によれば、「Diana（1859-1937）はラングーン（現ミャンマーのヤンゴン）に居住していたが、1889年に Apcar M. Apcar 氏（1855-1906）と結婚。夫妻は1891年に神戸に移住し、貿易商会を経営。1906年にアプカー氏の死後、ダイアナ女史が事業を引き継ぎ横浜に移住した」という。「年譜」の「系譜」には生歿年の記録は示されているが、月日の記録はない。

更に、手稿「年譜」には次の内容が記されている。

1906年 A. M. Apcar の死後、Diana 未亡人が移転した住居は、横浜市山手町220-A、1919年には同町219番地へ移る。1923年関東大震災により同町219番地の家屋倒壊。同年 Michael の娘 Marie が幼時に死亡。1937年 Diana 死亡、1939年 Ruth 米国に移住、1941年日米開戦、Michael 投獄、1942年、Michael 横浜から軽井沢へ移送（抑留）。1945年、横浜市山手町220-A の家屋、空襲により焼失、1945年 Michael 一家、米国・サンフランシスコへ移住…。

以上が、Apcar 家の半世紀にわたる在日概史である。

これら「墓誌」、「墓碑銘」、「年譜」の記録を対照して、同家の人物の同定を行う。

「年譜」の Apcar M. Apcar とは、墓碑の AP(?)CA(?)R MICHAEL APCAR（1855年12月31日生、1906年11月？日歿）と考えられる。「墓誌」には歿年月の記録はないが、末尾の J. W. M. なる人物による12月１日の記載から、それに近い月日ではないかと想定される。墓碑銘の歿年月は November1906と判読し得るが、日付は判読不能である。「墓誌」によれば、死亡時間が「木曜日未明」とある。当時の暦を参照すると、1906年11月のうち、木曜日は１日、８日、15日、22日、29日である。墓碑銘の２に続く数字は２あるいは９であるが、刻字の字形から22と判読し得る。つまり1906年11月22日逝去、その９日後の12月１日に「墓誌」が記されたと考えられる。

また「年譜」の Diana（1859-1937）とは、墓碑の DIANA ACABEG APCAR（1859年10月17日生、1937年７月８日歿）であろう。

では、もう１基の小墓碑は誰のものか。「年譜」によれば、アプカー夫妻には長女 Rose（1890年生まれ）と Michael（1891年・生）、Ruth（1896年・生）の２男、計３人の子供がおり、Rose は1913年に結婚後、ジャワに移住、1896年生まれの二男 Ruth は1939年にアメリカに移住、長男の Michael とその家族だけが日本に在留していた。「墓碑銘」に刻まれた「？？RIE DIANA APCAR」とは、1923年２月23日に生を受け、同年７月、関東大震災の２か月前に亡くなった Marie と考えられる。

さて、以上の記録資料を照合すると、A. M. Apcar なる人物について次のことが判明する。

1881年に25歳で香港へ移住、同地でアプカー海運を興し、その10年後の1891年には横浜にアプカー商会を設立したことになる。しかし、「年譜」では「1891年に神戸移住、貿易商会経営、アプカー氏の死後、神戸より横浜に移住…」とある。では、商会の設立は、横浜と神戸といずれが先なのか。

４．アプカー商会：Japan Directory 記事及び居留地記録から

幕末～明治期の開港場、居留地では、人名・名士録や機関名鑑、欧字新聞などが数多く刊行されていた。これらの資料は、当時の居留地における外国人（主として西欧人）の出身国や居住地域、外国公館、官公署、規則、交易商会の業種や業態など、居留地・港市における外国人の動向を知る貴重な史料である。

1860年代から1920年代までの間に、日本に関する記事を掲載した Directory とは、正確にいえば、神戸・横浜・香港で発行された３種の資料である。そのうち香港では1860年以降に China Directory が発行され、その一部に Japan Directory が含まれている。

横浜刊行のものには①1870年代以降に発行された The Japan Herald Directory、②1871年に発行された The Japan Gazette Directory（後1879年に Japan Directory と改題、1923年まで発行）、③1925年に刊行された The Directory of Japan、④ Meiklejohn's Japan Directory（創刊年不明）がある。

神戸で発行された Directory には① Japan Chronicle Directory（1890年創刊、1899年 The Japan Chronicle と改題）、② Kobe Directory/Kansai Directory（創刊年不明）がある。

これらの Directory に関する詳細な紹介および現存資料名とその所在地・所蔵機関については、立脇和夫氏の論文に詳しい[8]。本稿では、立脇和夫氏の監修による復刻版資料『幕末明治在日本外国人・機関名鑑』（全48巻）を利用した。この Japan Directory は、次に触れるように、異なった名称で刊行された４つの元資料に依拠している。復刻版の第１期は、元資料に初めて日本に関する記述が現れる1861年（文久元年）から、条約改正が行われ内地雑居が成立した1899（明治32）年までを収録し、その後更に1912（大正元年）まで収録している。

復刻版の巻頭凡例によれば、Japan Directory とは、複数のタイトルで発行された以下の元資料を編纂したものである。

① The Japan Gazett（ママ）Hong List & Directory（のち The Japan Directory と改題）② Japan Herald Directory ③ The China Directory ④ The

Chronicle & Directory For China, Japan & The Philippines。

これらの史料の内、①②は横浜で YOKOHAMA DIRECTORY のタイトルによって刊行、③④は香港で刊行されている。復刻版では①②の全頁、③④の資料のうち日本の Directory 部分のみを収録している[9)]。

上記復刻版資料の中で、アルメニア人に関する記事を抜粋する。

（以下、J. D.=Japan Directory）

1）“Apcar Line of Calcutta Steamers, Agent［…A. Barnard 75］”（Yokohama Alphabetical List in J. D. vol.x, 1888）
2）“Barnard, Arthur 75, & 19 Bluff”（Yokohama Alphabetical List in J. D. vol.x, 1888）
3）“Apcar Line of Calcutta Steamers Agent-A.Barnard-75”（Yokohama Alphabetical List in J. D. vol. xi, 1889）
4）“Apcar Line of Calcutta Steamers（Yokohama Alphabetical List in J. D. vol. xii, 1890）
5）“A. M. APCAR & CO. Merchant and Commission Agents, A. M. Apcar, Z. Yoshida, H. Nakamura”（Yokohama Alphabetical List in J. D. vol. xvii, 1895）
6）“SANNOMIYA, E. A. Apcar, Import and Export Merchant, Office and Residence.”（Kobe Alphabetical List in J. D. vol. xx, 1898）
7）“Apcar & Co., A. M., 49”;
“Apcar, A. M. Apcar & Co., 49, and 224, Bluff;”
“Apcar, Mrs. A. M. 224, Bluff;”
“Apcar, G. J., A. M. Apcar & Co., 49”
（以上4行、Yokohama Alphabetical List in J. D. vol.xxi, 1899）
8）“34-B, M. F. ARRATOON. Merchant and Commission Agent” ;ARRATOON F. M. 34-B, Shimoyamate-dori.（Kobe Alphabetical List in J. D. vol. xxi, 1899）
9）“Apcar & Co., A. M. 163, Sannnomiya-cho, sanchome and Great Eastern Hotel”（Kobe Alphabetical List in J. D. vol. xxxv, 1906）
10）“Apcar & Co., A. M. Great Eastern Hotel, 36, Sakaye-machi Itcho-me, Division Street.”（Kobe Alphabetical List in J. D. vol. xxxv, 1906）

上記 Japan Directory 中に Apcar 関係の記事が現れるのは、1）1888（明治21）年から　4）1890（明治23）年までの資料であり、横浜の「アプカー・カルカッタ汽船運輸」として掲載されている。その後、5）1895（明治28）年には、「アプカー商会」として掲載された。A. M. アプカーは、カルカッタに本拠を置く「アプカー海運」の支店として横浜に「アプカー汽船運

輸」を設立し、その後、1895年からは新たに「アプカー商会」を開業したと考えられる。１）の記事中に現れる Agent［A. Barnard］とは、同 vol. x（1888）の別の項目に現れる "Barnard, Arthur" であり、アプカー汽船運輸の代理人であったと考えられる。

Directory の末尾には通例、事業所の所在地あるいは住居が表示される。その bluff とは、原義は「崖下」であるが、横浜在留の外国人は、丘のふもと一帯を「崖下 bluff」（山手）と通称した。Japan Directory vol. x の付録地図によれば、bluff とは外国人墓地の東、居留地の西に接する一帯の「山手町」であった。今日の元町の北、本牧の南に位置する。「横浜地名辞典」には次のように説明されている。

「山手町（明治32年７月24日）　明治32年に外国人居留地の26か町を廃止し、その全区域をもって山手町を新設した。古くは久良岐郡北方村といい、慶應２年11月23日に調印した「横浜居留地改造及競馬場墓地等約書」により、山手地所を外国人へ貸すように決め、明治17年７月に…26か町を新設した。町名は横浜の山手に当たる所から名付けた。…横浜の外国人は山手を「崖」を意味する英語で「BLUFF」と呼んだ。」（77頁）

５）のアプカー商会の項に連記されている「Z. Yoshida, H. Nakamura」の一人 Z. Yoshida は後述（10頁）するように、吉田善太郎であろう。H. NAKAMURA については不明である。

さて、神戸人名録 Kobe Directory に「アプカー」なる人物が初出するのは、６）であり、そこには［SANNOMIYA, E. A. Apcar, Import and Export Merchant, Office and Residence］とあり、1898年のことである。ただし A. M. Apcar とは異なる E. A. Apcar の名義である。この記事によれば、輸出入業の「事務所兼居宅」は神戸の中心地三宮であった。ただし、翌1899年の７）によれば、アプカー商会及びアプカー夫妻の住所は、依然として横浜にも存在していた。

さらに９）によれば、1906年の「アプカー商会及びグレイト・イースタン・ホテル」の住所は、「三宮町３丁目163番地」であり、これは６）と同じ住所ではなかったか。10）1906年の「アプカー商会及びグレイト・イースタン・ホテル」は、「栄町１丁目36番地（Division Street）」に変わっている。このことから、三宮町３丁目から栄町１丁目に移転したことが考えられる。

以上から、アプカーは、すでに1888年前には横浜に「カルカッタ・アプカー商船運輸」の支店を置き、1895年以前に「アプカー商会」を設置、1895年の前後に、神戸に「アプカー輸出入会社」を、そして1906年には「グレイト・イースタン・ホテル」を「三宮町３丁目」に創業、その直後に「栄町１丁目」に移したと考えられる。香港から横浜にそしてさらに後に神戸に事業を広げたのではないか。

６）の E. A. Apcar、７）の G. J. Apcar、８）の M. F. Arratoon はいづれも明らかにアルメニア人名である。だが、彼らが A. M. Apcar の係累であるのか、あるいは別なアルメニア人であるのかは不明である。いずれにせよ、E. A. はアプカーの二人の子息のいずれでもない。1898、99年頃の神戸・横浜には、明らかに A. M. Apcar の家族以外にも、アルメニア人が居住しあるいは事業を行っていたことが窺われる。

アプカー商会とは、海運業のほかに一体どのような業種・業態であったのか。『居留地人物商館小辞典』（1998年）[10]は、わずかながら手掛かりを与えてくれる。

「アプカ商会 Apcar & Co. ドイツ系貿易商社
アルメニア人アプカ（ママ）が1890年に設立。エジプト、インドへの羽二重の輸出で成長を遂げた。神戸のグレート・イースタン・ホテルの経営に失敗したが、絹綿加工品・古物・玩弄物の輸出で息を吹き返し、1906年合名会社とした。羊皮・アラビアゴムの輸入品担当に中国人採芝林、支配人兼日本人部長で輸出品の担当に吉田善太郎、出資者にして庶務・会計担当に鎌倉郡中川村出身の石渡義助がいた。［所在地］No. 70（1891-）→ No. 49（1895-1923）→ No. 164（1926-42）」

以上から、A. M. アプカーについて、「民族」としては「アルメニア人」、「墓誌」では「ロシア国籍」、そして商会概説では「ドイツ系商社」、業種としてはカルカッタに本拠を置く「アプカー海運」、そしてマレーシアのペナン、更に、香港・横浜・神戸にも支店を置く「海運・交易事業家」としての姿が立ち現れてくる。しかしなお不明・推測の史実が多く、拠点を置いたカルカッタのアプカー海運、香港でのアプカーの事業、マレーシア・ペナンに

おけるアプカーの交易活動については、稿を改めて考察する。

５．アルメニア人コミュニティの存在：英国議会文書記録から

［図４］は在横浜居留地（及び雑居地）在留外国人と事業所に関する英国側の統計（1898年）[11]である。17カ国5,213名、事業所数361の内、アジア系外国人の中国人（61％）を除いて居留民については、英国（19％）、米国（７％）、ドイツ（４％）が多数を占めた。この統計の中には、「アルメニア人」、アルメニア系事業所は存在しない。しかし、1898年時点では「墓誌」「年譜」「ディレクトリ」「居留地地図」「居留地機関」などの記録から、ほぼ確実に横浜にアルメニア人コミュニティが居留していたことは明らかである。

「墓誌」に記された「ロシア国籍」、『居留地人物商館小辞典』のアプカ商会 Apcar & Co. の「ドイツ系」貿易商社、そして、17世紀の英国東インド会社以来、国際交易において相補的な関係にあった「英国」との関係資料から、統計上は、British, Russian, German のいずれかの国に「帰属」していたのではないかと考えられる。

６．居留民情報の媒体：幕末・明治期新聞記録から

先述した「墓誌」は、横浜・神戸来住以前のアプカー氏の足跡について、「Kobe Herald 紙」を引用しつつ「25歳頃から10年余り香港に滞在し、事業を成功させ…」と紹介している。では、Kobe Herald 紙とは、どのような媒体であり、アプカーについて、なにをどのように伝えたのか。残念ながら、現在、同紙はどこにも保存されていないという。したがって、Kobe Herald の記事から、香港におけるアプカーの事績に関する詳細は辿り得ない。

しかし、ここで、Japan Directory とともに、幕末・明治期の横浜・神戸における居留民の動向を伝えた Kobe Herald など欧字新聞媒体について、その内容と歴史的役割について、概観しておきたい[12]。

幕末から大正期にかけて、神戸・横浜・長崎・香港などの旧居留地では、在留欧米人を主たる読者対象として、数種の欧字新聞が発行されていた。こ

れらの新聞は同時期の在日外国人、特に欧米人の事業活動や彼らの日本に関する関心や動向を知る上で重要な媒体である。

神戸では、慶応３（1868）年１月４日、兵庫開港の３日後に最初の英字新聞ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド（Hiogo and Osaka Herald）が創刊され、それを嚆矢として、ヒョーゴ・ニューズ（Hiogo News, 1868.4）、コーベ・アドバタイザー（Kobe Advertiser, 1787）、コーベ・ヘラルド（The Kobe Herald, 1888）、コーベ・クロニクル（The Kobe Chronicle, 1891.10、後にジャパン・クロニクルに改称、1905.1）などの各紙が創刊・廃刊・吸収・合併を繰り返しながら、熾烈な競争を繰り広げた[13)]。

ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド紙は、居留地の会議録をはじめ、居留地の工事、保健衛生・警察消防・娯楽（競馬・演劇など）、領事裁判・商業情報・領事館の布告・日本の国内情勢・本国情報・宣伝・広告など、居留地世界の情報全般を提供する記事を掲載した。ヒョーゴ・アンド・オーサカ・ヘラルド、ヒョーゴ・ニューズ、コーベ・アドバタイザーに続いて創刊された、第四の日刊英字夕刊紙がコーベ・ヘラルド紙である。同紙の発行元である神戸出版社発行の『神戸人名録』（The Kobe Directory）の1898（明治31）年版によれば、A. W. Curtis（Editor & Manager）を代表にA. Rozario, T. Nakagawaによる発刊であった。同紙はその後、1937年頃にコーベ・ヘラルド・アンド・オーサカ・ガゼット（The Kobe Herald and Osaka Gazette）と改称するが、再び元のコーベ・ヘラルドに戻ったという。重要なことは、同紙のうたい文句が「あらゆる階層の人々の家庭に配布され、愛読されるため、広告主に最大の利益をもたらす夕刊紙」であり、かつ「日本政府に好意的な記事を掲げ、日本政府の忠実な支持紙」であったという[14)]。このことは、亡命アルメニア人の日本在留のあり方と日本での事業展開の姿勢を理解する上で、重要なカギとなると考えられるが、欧字新聞に見られる在外亡命人の活動とその役割については、あらためて考察を加えたい。

７．グレイト・イースタン・ホテル：明治期地図・絵葉書から

19世紀から20世紀初頭にかけて、南アジア（インド）、東南アジア（シンガポール・マレーシア・ビルマ・インドネシアなど）各地に、アルメニア人

コミュニティが当時としては最高のホテルを次々と創業した。そうした事実は、観光史研究ではつとに知られている[15)]。しかし、アルメニア人が、明治期の日本においても、いくつかのホテルを創業していたことはほとんど知られていない。「墓誌」が伝えるグレイト・イースタン・ホテルもその稀有な例の一つである。このホテルの所在とアプカーによる経営について検証を加える。(　)は筆者注

先述の「墓誌」によれば、「５年程前（1901年頃)、(アプカーは）神戸のグレイト・イースタン・ホテル（the Great Eastern Hotel）を設立…。(ホテルは）元々 sakaye-machi にあったが、ほぼ１年後には現在の手ごろな地に移った…」。また、1906（明治39）年の Japan Directory（vol. xxxv）には、Apcar Co. 及び A. M. Apcar の名とともに、Great Eastern Hotel とその住所が記述されている。1900年代初めに、このホテルが創業されたと考えられる。1906年の Kobe Directory（Japan Directory vol.xxxv 所収）付録地図［図５］には、SAKAYEMACHI の南、NISHIMACHI の西に、確かに Great Eastern Hotel が存在する。現在の栄町通１丁目に位置する区画である。

ところで、神戸・旧居留地には、幕末から大正にかけて数多くの欧風ホテルが建造され、それらは居留地民や一時滞在の西欧人の娯楽・リゾート施設として享受された。そうした欧風ホテルの多くは、同時期に刊行された「絵葉書」に印刷され、好評を博した。それらの画像は現在、デジタル・アーカイブズ「ホテル幻影・神戸」に記録・保存されている。

古絵葉書収集・鑑定家Ｆ氏の手元に２葉の彩色絵葉書がある［図６］。１葉は海側（海岸通）から山側（六甲山）に向かって写したもの、もう１葉は道路中央（西町通）から西側に向かってホテル正面を写したものである。Ｆ氏の鑑定によれば、以下の点が明らかになる。

①彩色絵葉書は、明治33（1900）年から市販され、当時珍重されたスーベニアであった。

②絵葉書の通信部分が、スペースの３分の１を占めるのは、明治43（1910）年から大正７（1918）年までのものである。

③モノクロ写真に彩色する図柄、葉書の紙型、形式、文字、紙質の特徴。

以上の鑑定から、これら２枚の絵葉書は1890年代～1910年頃のものであろうと考えられる。２葉の葉書は、構図は異なるが同一のホテルを写したもの

である。葉書１［図６－１］の下部には右から左書きの漢字で「神戸西町通」とあり、左から右書きで「Division Street 36 The Great Hotel, Kobe」と印刷されている。葉書２［図６－２］の下部には右から左書きの邦字で「神戸グランドホテル」、左から右書きで「Grand Hotel, Kobe」と印刷されている。つまり、アプカーが1901年頃に創業した「グレイト・イースタン・ホテル」は、当時の栄町３丁目36番地（36, Division Street, Foreign Settlement）、現在の栄町通１丁目南に存在した。しかし、同じホテルと考えられるホテルは、別な絵葉書では、名前を Grand Hotel と改めている。名称を変えたこのホテルが、同じ A. M. Apcar 氏の経営によるものかどうかは定かではない。「１, ２年後に移った現地のホテル…」とはどの地区にあったのか、また、「墓誌」にいう「塩屋の Beach House Hotel」については、神戸 Oriental Hotel 別館であった Shioya Hotel（古絵葉書では「THE ORIENTALS SEASIDE VILLA、NEAR KOBE JAPAN」）があったが、それが Beach House Hotel と同一であったかどうかは、確定的には説明できない。しかし、アルメニア人 Apear の経営していたホテルが、神戸に存在していたことは明らかである。

おわりに

ディアスポラ、民族離散、エクソダス、海外雄飛など、学術的表現・用語はともかく、さまざまな動機・要因・目的によって、さまざまなコミュニティが現実に海外に出た。そのうちの一つの事例が、日本におけるアルメニアン・コミュニティである。小稿はそのごく端緒を描いたに過ぎない。今後、断片的な資料・史実を再構成して、「アジアのアルメニアン・コミュニティの近代」の全体像に近付けたい。

＜追記＞

2013年に刊行された『アジアの都市と農村』（追手門学院大学国際教養学部アジア学科編、和泉書院、2013年10月刊）への論稿執筆中に、急病による入院・加療によって、私は本書への寄稿が果たせなかった。2014年、予期もせず同学の武田秀夫さんが退休されるという。13年間の同僚としての普段のお付き合いの中、同氏の風貌、含羞を帯びた、遠慮がちな心配りの言葉の

端々から、心延えがいつも感じられた。同書の刊行にも大変な尽力があったとうかがっている。同氏の退休記念論集に、甚だ不十分な拙稿ながら、かろうじて間にあって正直ほっとしている。お礼申しあげたい。

注

1．それらの史実を示す研究としては以下のものがある。
Baladouni, Vahe and Margaret Makepeace（eds.）*Armenian Merchants of the Seventeenth and Early Eighteenth Centuries, English East India Company Sources.,* American Philosophical Society, 1898.
Manuelian P. M.（ed. & revd.）　*Merchants from Ararat; A Brief Survey of Armenian Trade through the Ages.,* Ararat Press, N.Y., c1979.
Basil Anne, *Armenian Settlements in India from the Earliest Times to the Present Day. The Armenian College,* Calcutta, 1969.

2．Wright, Nadia H. *Respected Citizens, the History of Armenians in Singapore and Malaysia.,* AMASSIA, Australia, 2003.

3．重松　伸司「インドの少数民族、アルメニア人」、朝日新聞（大阪版夕刊）、2002.1.18.
同「ベンガル湾のアルメニア商人たち　1」「世界史のしおり」帝国書院、2004.10.
同「ベンガル湾のアルメニア商人たち　2」「世界史のしおり」帝国書院、2005.1.
同「神戸・横浜のアルメニア人、アプカー氏」「世界史のしおり」帝国書院、2006.1.
同「シンガポールのアルメニア商人たち　3」「世界史のしおり」帝国書院、2006.3.
同「ベンガル湾のアルメニア商人たち　4」「世界史のしおり」帝国書院、2006.10.

4．重松　伸司『ベンガル湾海域文明圏の研究Ⅰ－アルメニアン・コミュニティの組織と経済活動を中心に』研究成果報告書（未刊行）、77頁、2007年３月

5．「横浜外国人墓地リスト」横浜外国人墓地管理事務所所蔵、作成年不詳

6．アプカー氏が積極的に活動したといわれる神戸のフリーメースンについては、神戸の英字新聞 Japan Chronicle 社編集・発行の “Jubilee Number 1868-1918”（邦文全訳書『ジャパン・クロニクル紙　ジュビリーナンバー　神戸外国人居留地』堀博・小出石史郎共訳、土居晴夫解説、神戸新聞出版センター刊、1980）の「神戸のフリーメースン」の項に、フリーメースン創設の事情とその後の経緯が述べられている（100～102頁）。
「1869年９月、神戸在住の多くのフリーメースンたちが英国の総本部に神戸のメーソン団を正式に承認し、“ライジング・サン支部”と称するよう請願…10月13日、（居留地）18番のウオーレン・ティルソン商会の建物ではじめて集会

が開かれた…1870年２月16日、英国総本部により承認され、認証状が発送されるようになった。５月５日、認証状が神戸に到着、その月14日に兵庫・大阪支部の結成式が行われた…その後会員が急増してきたので会館を建てることになり…（居留地）81番を買い取った…（同会館は）長い間メーソンの集会に使用されてはいたが、人手にわたり…京町82番で集会を開いていたが、再びメーソンの会館と倶楽部が山手の山本通に建てられ、1903年５月23日に献納された。以来そこでメーソンの集会が開かれている。」

また、本項の注８（104頁）によると、フリーメースンの日本における最初の組織は横浜支部であった。神戸のフリーメースンの活動については、居留地の行事局長や英国領事など、英独の有力な居留地民が公的に肩入れしていたことが窺われる。

７.「ダイアナ女史とその周辺について」『アララト通信』第12号、1995年４月28日発行

８. 立脇和夫「戦前期の“ジャパン・ディレクトリー―その所在調査と歴史研究―」『長崎大学東南アジア研究年報』27巻、pp.109-126、1985.

９. 立脇和夫監修『Japan Directory　幕末明治在日外国人・機関名鑑』（1861～1912）復刻版、全48巻、別巻２，ゆまに書房、1996年７月～1997年７月刊（追手門学院大学図書館所蔵）。なお、The Japan Gazett（ママ）& Hong List & Directory の Hong とは、「中国、日本にある商館、洋行」であり、中国語で店を意味する「行」、北京官話では Hang、広東では Hong と発音したことに由来する（同論文注８）

10. ＜アプカ商会＞「居留地人物・商館小事典」66頁（横浜開港資料館編『図説横浜外国人居留地』有隣堂、平成10年）所収。

11. British Parliament Papers, 10 Japan, sessions 1896-99.

12.「神戸市文書館収蔵資料　英字新聞（神戸旧居留地関係）概要」、神戸市文書館

13. 鈴木雅雄「幕末・明治期の欧字新聞と外国人ジャーナリスト」『コミュニケーション研究』21号、上智大学コミュニケーション学会編、1991.

14. 鈴木雅雄「神戸英字紙界と日露戦争」『コミュニケーション研究』36号、上智大学コミュニケーション学会編、2006.

15. 注２および Gretchen Liu (ed.) Raffles Hotel., Landmark Books, Singapore, 1992.

［図１］　A. M. Apcar 墓誌

14 Apcar A. M. Rus. 1906 Mr D

DEATH OF MR. A. M. APCAR.

We now learn that the death of Mr. A. M. Apcar, which took place at an early hour on Thursday morning in the Great Eastern Hotel, Kobe, was the result of a sudden apoplectic seizure. He had only returned from Yokohama on Tuesday and on Wednesday was apparently quite in his usual health, conversing after dinner with a number of friends and retiring to his room about ten o'clock. A few minutes later assistance was summonéd by one of the boys and on the manager and Dr. Martin going to Mr. Apcar's room he was found to be unconscious. Dr. Kilpatrick was also summoned but nothing could be done and Mr. Apcar expired at 1.30 a.m.

The deceased gentleman, who was an Armenian, born in Ispahan some 50 years ago, was related to the proprietors of the well-known Apcar line of steamships. The *Kobe Herald* states that some twenty-five years since, he established a successful business in Hongkong remaining in the island for about ten years. He then proceeded to Yokohama, where he founded the firm of Messrs A. M. Apcar and Co., which carries on an extensive import and export business and has branches at Kobe and at various other ports in the East and in Europe. Some five years ago, Mr. Apcar sought a further outlet for his energies in the establishment of the Great Eastern Hotel at Kobe. Originally located in Sakaye-machi, the Hotel moved at the end of about a year to its present commodious premises. Mr. Apcar also acquired a year or two ago the Beach House Hotel at Shioya, where many of his leisure hours were passed. His principal work, however, lay in the control of the business of Messrs. A. M. Apcar and Company, the hotels being placed under the direction of managers. The deceased gentleman was admitted as a Free Mason while at Hongkong and was a member of one of the lodges at Kobe. Being of a quiet and retiring disposition, Mr. Apcar did not figure very prominently in social or public life, but he had a large circle of acquaintances by whom he will be greatly missed. Much sympathy will be felt with Mrs. Apcar and her three children in their sudden bereavement.

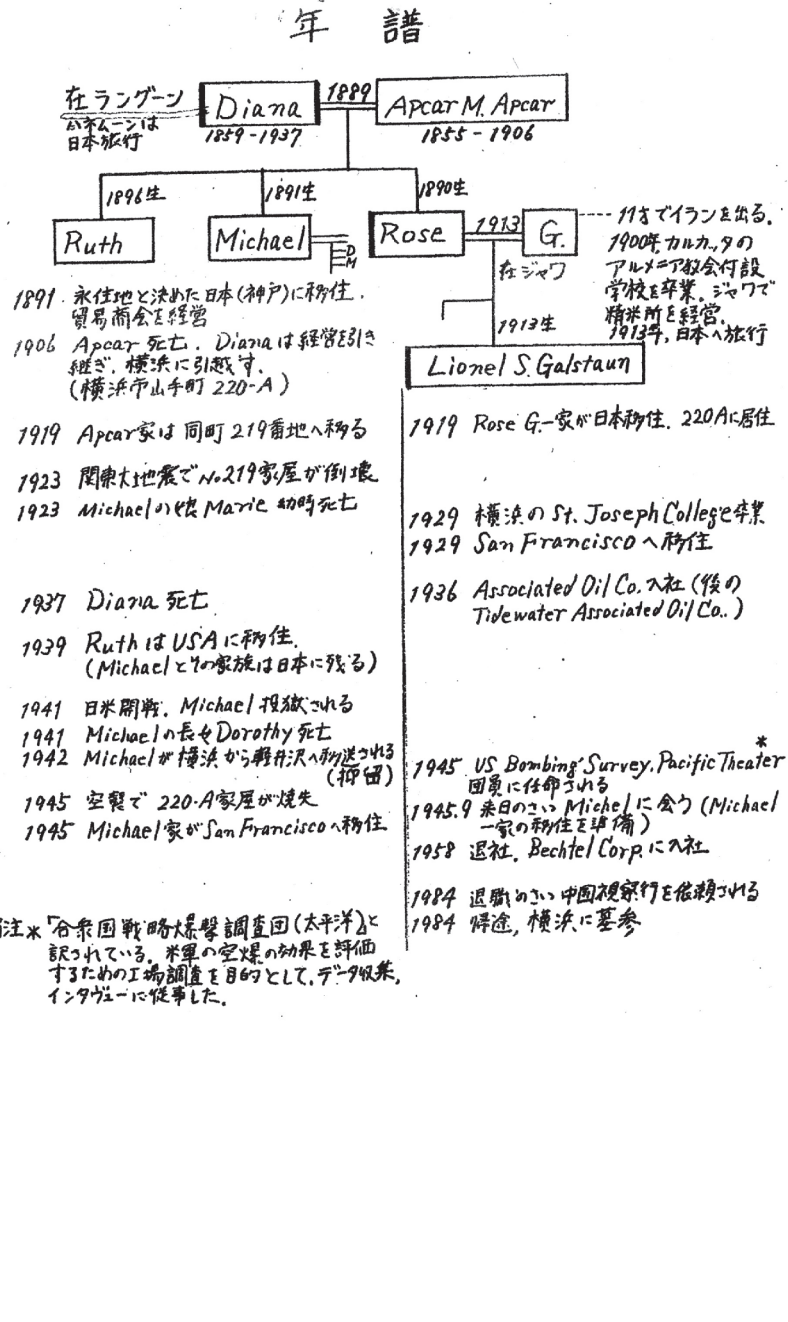
J. W. M. Dec. 1. 1906

［図２］　Apcar 家墓碑

DIANA AGABEG APCAR

LOVE NEVER FAILETH

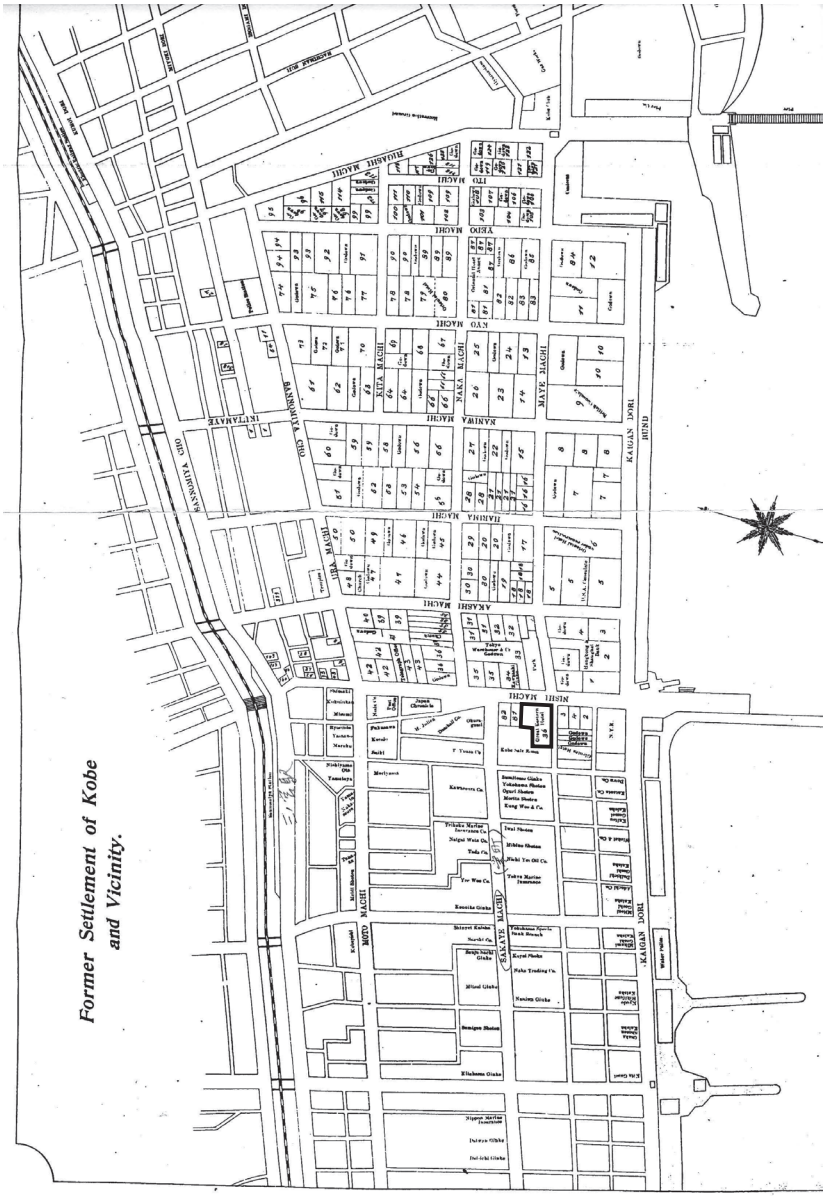
［図３］ Apcar 家年譜（手稿）



［図４］ Return of British and other Foreign Residents and Firms At the Port of Yokohama（Kanagawa）on December 31, 1898.

Nationality	*Number of Residents*	*Number of Firms*
British	989	98
American（United States）	376	38
Austro-Hungarian	35	2
Belgian	6	…*
Brazilian	…	…*
Chinese	3,185	120
Danish	42	3
Dutch	43	4
French	127	28
German	211	29
Italian	22	5
Mexican	…	…*
Portuguese	…	…*
Russian	34	2
Spanish	20	2
Swedish and Norwegian	29	1
Swiss	94	29
Total	5,213	361

［図５］ KOBE SETTLEMENT MAP(1906)



［図６−１］　神戸・グレイト・イースタン・ホテル（古彩色絵葉書）

［図６−２］　神戸・グランド・ホテル（古彩色絵葉書）